

2020年7月26日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神と共に歩むこと」

聖書：ミカ書6：1～8

《人よ、何が善であり／主が何を前にお求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。》この言葉にはどのような背景があるのか。ここはイスラエルの民が「疲れている」状況がある。神に礼拝を奉げること疲れ、神への信仰が見えなくなっている民の姿がある。その要因には、これまで神がくださった恵みを忘れ、歴史を覚えなことが挙げられる。それは語られた神の言葉を学ばず、この世の歴史を学ばないことにある。

このミカ書6章8節の「正義」、「愛する」、「へりくだる」という三つのことを行うのは容易ではない。この中の一つでも極めるのはかなり難しい。人は弱さを持つもの。ここは、私たちが「正義を行うこと、慈しみを愛すること、へりくだること」が出来ると言っているのではない。主なる神ご自身が「正義を行う」方、「慈しみを愛する」方、「へりくだる」方であり、その神が弱さを持つ私たちと共に歩んでくださるということ。その神が共に歩んでくださるのだから、私たちも「正義を行うこと、慈しみを愛すること、へりくだること」に努めて行くことが、自ずと導かれていくということではないかと思う。そしてこのミカ書は常に教会のあり方を照らし、教会の方針を指し示す“指針”としてある。

ドナルド・ドール著『時代が求めるキリスト者の生き方』がある。ミカ書6章8節を用いて、キリスト者は「どう生きる者なのか」と問う。ミカ書の「正義を行うこと、慈しみを愛すること、へりくだること」の3つは、どれが欠けても、劣ってもならないという。何故そう厳しく語るのか？キリスト教会がこの世に登場してから何をしてきたか？教会は、歴史と共に世界の宗教界の筆頭に挙げられるほどに成長した。しかしそのことは同時に、国家の権力者によって先導される神なき教会に成り下がってしまう。そのことが宗教改革という歴史を動かす状況が生まれたのだが。著者は、そういう歴史を踏まえ、キリスト者は、教会は3つの領域をバランスをもってこの世に立つ事が大事であると強調する。

一つ、個人の内的領域、神の存在を知り、神と私との関係。二つ、個人の対人的領域、人と人との関係において「慈しみを、愛することを」大事にしていくということ。三つ、個人の社会的領域。地域社会、国、国々の状況に目を配り、「正義を行う」ということ。また教会は、社会と共に歩み、開かれたところであることが大事であると言う。このことは、私が、教会が「神と共に歩むこと」と、させて頂いているのかというバロメーターでもあろうかと思う。

「神と共に歩むこと」という言葉の中に、その3つの領域のことが含まれていることを覚えたい。(神谷)